

授業科目名	特別活動論演習
科目番号	CB23272
単位数	1.0 単位
標準履修年次	3 年次
時間割	春AB 火2
担当教員	京免 徹雄
授業概要	<p>特別活動(学級・ホームルーム活動、児童会・生徒会活動、学校行事、クラブ活動)は、様々な集団活動に自主的・実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」のための資質・能力を培う取組です。日本型教育モデル“TOKKATSU”として、近年は海外からも注目されていますが、一方で理論やエビデンスを十分に活用しないまま、経験則(教師の暗黙知)で実践されているという弱点も抱えています。</p> <p>本授業では、日本特別活動学会の学会誌である『日本特別活動学会紀要』に掲載された論文を精読することで、人文・社会科学の観点から特別活動を考察し、その特質および教育効果のあるカリキュラム、実践、評価について探求していきます。具体的には、各回のテーマに沿った形で、毎回2本の研究論文について担当者を決めて発表し、ディスカッションを行います(受講者の人数によって、扱う論文の本数は変更する可能性があります)。</p>
備考	対面
授業方法	演習
学位プログラム・コンピテンスとの関係	教育学における総合的思考力 教育学的実践力
授業の到達目標(学修成果)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1.論文の講読を通じて、理論と実践の関係について理解を深める。</li> <li>2.特別活動を科学的に分析することで、その特質を把握する。</li> <li>3.論文講読およびディスカッションを通じて、批判的思考力を培う。</li> <li>4.効果的な特別活動の在り方について、自分なりの見解を表明する。</li> </ol>
授業計画	<p>専門誌の講読を通じて特別活動を「科学」することで、特別活動の理論、カリキュラム、実践、評価の在り方を追究し、自分なりの見解を確立します。</p> <p>第1回 オリエンテーション 研究対象としての特別活動 第2回 学級・ホームルーム活動の理論と方法 第3回 児童会・生徒会活動の理論と方法 第4回 クラブ活動・部活動の理論と方法 第5回 学校行事の理論と方法 第6回 道德教育と特別活動の連携 第7回 生徒指導と特別活動の連携 第8回 キャリア教育と特別活動の連携 第9回 海外における特別活動の展開 第10回 まとめ 特別活動を「科学」する</p>
履修条件	
成績評価方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リフレクションペーパー:40%(3%×8回)(主に関心・意欲をチェックします)</li> <li>・課題論文の発表:50%(主に関心・意欲、思考・判断・表現をチェックします)</li> <li>・まとめのレポート:26%(主に知識・技能、思考・判断・表現をチェックします)</li> <li>・3分の2以上の出席が、単位認定のための前提条件になります。</li> </ul>
学修時間の割り当て及び授業外における学修方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領の内容を理解していることを前提に授業を進めていきます。不安のある受講者は、小/中/高等学校学習指導要領解説の特別活動編を再確認しておきましょう。</li> <li>・自分が発表する回以外も、課題論文を必ず精読して授業に臨むようにしてください。</li> </ul>

教材・参考文献・配付資料等	<p>授業では毎回、レジュメを配布します。整理して保存できるように、ファイル等を用意してください。参考文献は、以下の通りです。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 吉田武男・京免徹雄編著、『特別活動』（MINERVA はじめて学ぶ教職）、ミネルヴァ書房、2020年。</li> <li>2. 日本特別活動学会編、『三訂 キーワードで拓く新しい特別活動』東洋館出版社、2019年。</li> <li>3. 山口満・安井一郎編著、『特別活動と人間形成』、学文社、2010年。</li> <li>4. 武藤孝典・新井浅浩編著、『ヨーロッパの学校における市民的社会性教育の発展 フランス・ドイツ・イギリス』東信堂、2008年。</li> <li>5. 日本特別活動学会、『日本特別活動学会紀要』第1号~30号</li> </ol>
オフィスアワー等（連絡先含む）	<p>木曜日：14時～16時。 研究室を訪問する場合、メールで事前に連絡をとってください。</p>
その他（受講生にのぞむことや受講上の注意点等）	<p>教科外活動であり、自治的な活動である特別活動は、バックボーンとなる明確な学問分野をもたず、展開を予想しにくいという実践上の難しさがありますが、大人が設定した枠組みに捉われずに子どもが文化を創り出すという点で、大きな可能性があります。単に「楽しかった」という一過性の経験に終わせず、この可能性を生かすためにはどうすればよいか、一緒に考えていきましょう。</p>
他の授業科目との関連	
ティーチングフェロー（TF）・ティーチングアシスタント（TA）	
キーワード	日本特別活動学会紀要，科学，エビデンス，理論と実践，集団活動，生活づくり